

## 高梨沙羅選手と伊藤有希選手

ちょうど昨年の今頃、韓国のピョンチャンで冬季オリンピックが実施されていました。皆さんは、大活躍した日本の選手達の記憶はあるでしょうか。

その中で、ジャンプ競技に日本期待の高梨沙羅選手と伊藤有希選手の2人が、その4年前のソチオリンピックと同様、連続で選手として選ばれ、参加しました。

4年前、高梨選手は、17歳、伊藤選手は、19歳。いずれも10代の選手でした。その時の高梨選手は、「世界に敵なし」で、ワールドカップで連戦連勝。日本人だけでなく、世界の誰もが金メダル間違いなしと予想していました。しかし、17歳の少女に負わせるにはあまりにも大きすぎるプレッシャーで、4位に沈みました。(私は、世界で4位、すごいなあと思いますが、期待が大きすぎて、そのようには捉えてもらえなかったようです。) この時、伊藤選手は7位。こちらも世界で7位という好成績でしたが、この入賞という素晴らしい成績は、ほとんど忘れ去られてしまいました。その時、涙で沈んでインタビューを受けていた高梨選手に、年上の伊藤選手が近寄り、「またここ(オリンピック)と一緒に戻ってこよう。」と、励まし、慰めたそうです。自分自身の悔しさを心に沈め、年下の選手を気遣っていたのです。

そして、4年後。今回は、ヨーロッパの選手たちが急成長し、高梨選手も伊藤選手もメダル獲得が難しいのではないかと言われ始めました。高梨選手は本番に向けてコンディションが上がったようですが、伊藤選手は、自分のジャンプに自信が持てないまま本番を迎えます。そして、当日は、高梨選手には、ジャンプ選手に有利な、絶好の向かい風が二本とも吹いていましたが、伊藤選手には、二本とも不利な追い風が吹いていたのは、テレビ放送でも分かりました。高梨選手は、銅メダル、伊藤選手は、前回よりも成績を落とし、9位でした。しかし、その時、伊藤選手は、自分の成績に落ち込むことなく、銅メダルに輝いた高梨選手に一目散にかけより、「おめでとう、よかったね。」と言って抱きしめた姿が、テレビでも大きく映し出されました。その時の伊藤選手の心境はその後のインタビューで「ソチオリンピックの時、沙羅ちゃんはとても苦しい思いをした。その後もずっと、自分と戦い続ける姿を見てきたので、心からよかったと思い、うれしくて思わず涙が出た」と話したそうです。自身の成績にも悔しさがあってもかかわらず、先輩として、友として、高梨選手をずっと思いやっていたのです。

何日かして、女子ジャンプ競技の選手達が帰国しました。多勢の記者たちから、メダルを持った高梨選手を囲んで、一緒に競技に参加した選手たちがメダルを指さすポーズを要求されたそうです。しかし、高梨選手は「これは、私だけの力で取れたメダルではない。私だけが主役ではない。みんなが、私のメダルを指さすポーズは私にはできない。」と断ったそうです。その代わりに、参加した選手全員で肩を組んだ写真に応じたそうです。「私を支えてくれた他の選手たちとみんなで獲ったメダルだった。」とマスコミに、そして国民に分かってほしかったそうです。そして彼女は、次のオリンピックでは、個人戦だけではなく、選手全員で喜びや苦しみを分かち合える団体戦を新種目にしてほしいという提案をしたいと話したそうです。どうやら、次のオリンピックで採用される可能性が高いとの事です。皆さんはどう感じますか。人はやはり、自分だけの力で生きているのではないのですね。互いに人を思いやる気持ち、とても大切な事だと思います。